

課題名 マタギの実践にみる知とスキルの変容過程の社会学的研究

研究代表者名 鷲谷 洋輔 (東北大学大学院教育学研究科)

研究の背景と目的

本研究の目的は、変容するマタギの知とスキルの実態をとらえることである。マタギに関する研究の多くは、その特異な行動様式やコミュニケーションの様態などに向かう民俗学的なアプローチが多数を占めてきた (たとえば Takeda 1972; 田口 1994, 1999; Knight 2008)。それらがマタギに関する民俗学的記録を提示する一方で、高齢化や継承者不足、増加する「獣害問題」と狩猟者養成への期待など、今日的な現状に基づく学術的検証にはなお大きな余地を残している。

これをふまえつつ、本研究ではマタギの実践と知の様態を現代的な文脈からとらえることを目指す。消えつつあるマタギの経験やスキルの継承を考えると、そこにはマタギの知を<伝達可能な情報>とする見立てが滑り込んでいる。例えばそれは、独特の通過儀礼や山言葉の使用、解体の儀式や集団内での分業形態などに見られるように、かたちを変えずに受け継がれる事象として措定される。

しかし、記録媒体や GPS などの普及が狩猟活動そのものの様態に影響を与えていること、あるいは動物愛護運動や様々な自然保護主義の機運の高まり、老いに直面するマタギたちの活動域の変容などを考えれば、マタギの実践やスキルを可変的なものとして見ることもできる。現代の輻輳するコンテクストの絡まり合いを改めて勘案すれば、これまでのアプローチではとらえきれない非情報的で即応的な実践が研究の射程に入ることになる。

対象と方法

以上から、本研究はマタギの「可変的な知」に注目する。受け継がれる固定的な知識ではなく、絶えず生成される知やスキルの様態をとらえることで、定型としてのマタギの知識や文化ではなく、そこに息づく実践のダイナミズムをとらえる試みである。

これをふまえ、秋田県湯沢市 A 地区でマタギとして知られる S 氏、H 氏を研究の主たる対象とし、彼らの狩猟、採集活動の参与観察を行う。ここでは特に、「見習いマタギ」としての徒弟的な参与を実施する。Wacquant (2004, 2005, 2011)が指摘するように、まさに生成の只中にあるマタギの性向を、それが経験される社会空間において検証することを企図している。また、参与観察における参与に比重を置く方法としての「subtractive inquiry」(Washiya 2021, p. 13) を発展的に用い、動画、音声による同時進行的な記録を併用するデータの収集を行う。さらに、身体論で注目される embodiment 論を導きの糸とし、先行研究と併せて検証を行う。

研究経過と得られた知見

本プロジェクトに係る実質的な調査は、おおよそ週に1度の参与観察を7月から2月までの8か月間行った。延べ200時間にわたる参与観察を通じた成果は以下3点に整理できる。

1) 活動の概観の把握

S氏、H氏らの活動は、山菜採り、キノコ採り、下草刈りや薪割りなどの準備、及び狩猟(有害駆除を含む)の大きく4点に大別される。いずれも季節、当日の天候、気象条件、ターゲットとなる山菜/きのこ/動物の生育と注文の状況などや知人からの要請などを総合的に勘案し決定される。活動内容は季節ごとに大きく当たりが付けられており、入山する場合は当日の状況をベースに目的地が決定される。持ち込む道具の準備や手入れも適宜行われる。ただし、田植えや稲刈り、果樹園での選定や収穫作業の手伝い、鮎獲り、ハタハタ釣り、雪下ろしなど、直接的に山仕事ではない活動も散見される。これらの活動は狩猟、採集と様々なかたちで関連しており、猟場や解体、獲物の分配等に関わる人的ネットワークと重なっている。



2) 一日のサイクルの把握

一日のサイクルは季節に応じて変動があるが、概ね早朝5時頃から作業小屋での準備に始まり、順次出発となる。冬季においては早朝6時頃から除雪作業が始められ、7時半ころに朝食を取り、9時前後に再び活動に入る。採集活動を行う山は作業小屋から遠くて車で10分、近いものは徒歩で入山する。参与観察で帯同したルートは20近くあるが、それ以外にルートは相当数考えられる。ルート(乃至は目的地)の設定は収穫物の生育状況や当日の予定に応じて適宜設定、変更される。収穫物は背負子に収め、正午を目途に作業小屋に戻る。そのまま作業小屋前で直売する場合もあるが、選別や下処理をして並べる場合もある。作業小屋と同じ敷地にはS氏の妻が切り盛りする食堂があり、そこで昼食を取る。

翌日の打ち合わせを含めた休憩ののち、午後 2 時頃に解散となる。

3) 考察の焦点：「単独行」と「山との全体的なかかわり」

参与観察を始めた季節が初夏であったこともあり、山菜採りが参与観察のベースとなった。ここでは山菜の種類を覚えることと、そのありかの特徴、その摘み方、背負子へのおさめ方といった山菜そのものの発見から確保、搬出、保存までの一連の流れを記録した。これらに加えて山を歩くうえでの「ルートの記憶」の重要性が改めて浮き彫りになった。一人で入山し採集することはなく、S 氏、H 氏の後ろを追う参与観察からは、両氏の足取りや収穫の手さばき、休息のタイミングなどをなぞる観察機会を得た。その一方で、S 氏、H 氏らがしばしば行うような単独での実践はなされずにある。

このことは、たとえば参与する調査者自身の方向感覚や位置取りの記憶の限界を浮き彫りにする。調査者として同一ルートを複数回同行しても覚えきれないケースもあり、特に帰路は景色がまったく違って見える経験に苦心することとなった。こういった調査者の身体を賭した参与観察には、調査者自身の身体性や特性が前景化する。

同時に、ルートを覚えるということは、新規参入者に広く共有される課題として S 氏、H 氏らに認識されてもいる。「やっぱ自分で入ないとだめっすな」という H 氏の語りに象徴されるように、ルートの記憶には単独行が重要とされる。この点は、一般的な参与観察が重きを置く対象となる社会集団との「共在」>という方法論的なアプローチと矛盾する。参与観察の参与を字義通り踏襲する限り、単独行は参与的ではない。方法としての集団への参与を墨守する限り、その集団が内包する暗黙知の共有にいたらない、という方法論的な課題がここに浮上している。集団性に入り込むには、単独での実践も必要になる、という逆説的な論点である。

このことは、S 氏、H 氏が頻繁に口にする「山を覚える」ということにも直結している。両氏の語りに見られるのは、単独行の重視だけでなく、四季を通じた入山の必要性である。たとえば広葉樹が葉を落とした冬場になると地形が露出するため、緑に覆われた山菜採りシーズンに見えにくいランドマークや地形的な特徴が明確になる。「冬場に猟をしながらマイタケがおがりそうなところもチェックしていく」と S 氏がいうように、狩猟と採集や冬季と秋季といった区分を貫く実践がそこに生起している。これは「山を覚える」ということのアプローチが、「山との全体的なかかわり」に依拠している、という一つの枠組みを示すものでもある。

今後の課題

学術論文の投稿と発表を行うことをもって本研究の成果とする。今後の具体的な課題は以下 2 点が挙げられる。

1) 年間を通じた活動内容の把握

積雪する冬季から春季にかけての活動への参与観察を行い、年間を通じた「山との全体的なかかわり」を検証するデータがさらに必要となる。当地は国内有数の豪雪地帯でもあり、雪かきや雪下ろしを行わなければ生活そのものが成り立たない。そういった活動を含めた参与観察を行うことで、雪とのかかわりとマタギの実践の連関をとらえる必要がある。降雪は狩猟対象となる動物の追跡を可能にし、地形や行動範囲を異なるものにする。降雪によって到達可能になる空間があることもここでは留意したい。

2) 「可變的な知」に係る考察

知の可變性をとらえるには、比較の原型となるべき知をとらえることが不可欠となる。現状の参与観察においては、マタギの活動における一般的な知識やスキルをとらえきるには至っていない。それが即応的なスキルであるということを調査者自身が見通す *skilled vision* (Grasseni, 2004) の体得もまた求められることになる。

こういった即応性や変化を見とめる具体的な実践として、イノシシの捕獲プロセスに関する参与観察の継続が今後の具体的な研究対象となる。当地においてイノシシの生息が確認されたのは東日本大震災以降であり、最初の捕獲は2012年にS氏によってなされたこと、以降も生息区域や冬場の行動様式などに不明な点も多く、何より当地のどの狩猟者にとっても捕獲経験のない動物であったことに着目したい。これまでの経験則のみでは対応ができないという事態が、必然的にこれまでの経験則をもとにした新たな試みを引き出している点に、「可變的な知」のありようが検証できると考える。

さらに、佐藤(2004)が掲げる民俗知に関する議論等を加えて考察していくことで、マタギの知を検証する学術的な意義をより明瞭にしていきたい。

参考文献

- Grasseni, C. (2004). *Skilled vision. An apprenticeship in breeding aesthetics. Social anthropology*, 12(1), 41-55.
- Knight, C. (2008). *The moon bear as a symbol of Yama: Its significance in the folklore of upland hunting in Japan. Asian ethnology*, 67(1), 79.
- 佐藤宏之. (2004). 共生の民俗知-持続的利用の技術知. 小国マタギ共生の民俗知, 266-286. 農山漁村文化協会.
- 田口洋美. (1994). マタギ: 森と狩人の記録. 慶友社.
- 田口洋美. (1999). マタギを追う旅: ブナ林の狩りと生活. 慶友社.
- Takeda, J. (1972). *An Ecological study of bear-hunting activities of the Matagi, Japanese traditional hunters. Journal of Human Ergology*, 1(2), 167-187.
- Wacquant, L. J. (2004). *Body & soul: Notebooks of an apprentice boxer. Oxford University Press, USA.*

Wacquant, L. (2005). Carnal connections: On embodiment, apprenticeship, and membership. *Qualitative sociology*, 28(4), 445-474.

Wacquant, L. (2011). Habitus as topic and tool: Reflections on becoming a prizefighter. *Qualitative research in psychology*, 8(1), 81-92.

Washiya, Y. (2021). Techniques without Names-Methodological Provocations from a Judo Dojo. *Qualitative Research in Sport, Exercise and Health*, 1-15.

謝辞

新型コロナウイルスによる様々な制約がある中で、S 氏夫妻、H 氏をはじめとする A 地区の方々には本研究の実施のために多大な協力を賜ったこと、心より感謝申し上げたい。また、本研究は東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター2021 年度プロジェクト研究助成による。記して謝意としたい。